

画工と幽霊

岡本綺堂

青空文庫

千八百八十四年、英国倫敦ロンドン発刊の某雑誌に「最も奇なる、実に驚くべき怪談」と題して、頗るすこぶ小説的の一種の妖怪談を掲載し、この世界の上には人間の想像すべからざる秘密又は不思議が存在しているに相違ない、これが即ち其の最も信すべき有力の証拠であると称して、その妖怪を实地に見届けた本人（画工エリック）の談話を其のまま筆記してある。原文は余ほど長いものであるから、今その要を摘んで左に紹介する。で、その中に私とあるのは、即ち其の目撃者たる画工自身の事だ。

今年の七月下旬、私は某友人の紹介で、貴族エル何某の別荘へ避暑かたがた遊びに行つた事がある、その別荘は倫敦の街から九哩ばかり距れた所にあるが、中々手広い立派な邸宅で、何さま由緒ある貴族の別荘らしく見えた。で、私が名刺を出して来意を通じると、別荘の番人が取あえず私を奥へ案内して、「あなたが御出の事は已に主人の方から沙汰がございました、就ましては此の通りの田舎でございしますが、悠々御逗留なすつて下さいまし」と、大層鄭重に接つて呉れたので、私も非常に満足して、主人公はお出になつてゐるのかと尋ねると、「イエまだお出にはなりません、当月末にはお出なざる

に違ありません」との事。それから晚餐の御馳走になって、奥の間の最上等の座敷へ案内されて、ここを私の居間と定められたが、こんな立派な広いお座敷に寝るのは実に今夜が嚙矢だ、併し後で考えるとこのお座敷が一向に有難くない、思い出ししても慄然とするお座敷であつたのだ。

神ならぬ身の私は、ただ何が無しに愉快で満足で、十分に手足を伸して楽々と眠に就いたのが夜の十一時頃、それから一寝入して眼が醒めると、何だか頭が重いような、呼吸苦しいような、何とも云われぬ切ない心持がするので、若や瓦斯の螺旋でも弛んでいるのではあるまいかと、取あえず寝台を降りて座敷の瓦斯を検査したが、螺旋には更に別条なく、また他から瓦斯の洩れるような様子もない、けれども、何分にも呼吸が詰まるような心持で、終局には眼が眩んで来たから、兎にかく一方の硝子窓をあけて、それから半身を外に出して、先ずほつと一息ついた。今夜は月のない晩であるが、大空には無数の星のかけ冴えて、その星明で庭の景色もおぼろに見える、昼は左のみとも思わなかったが、今見ると実に驚くばかりの広い庭で、植込の立木は宛で小さな森のように黒く繁茂っているが、今夜はそよとの風も吹かず、庭にあるほどの草も木も静に眠って、葉末を翻るる夜露の音も聞えるばかり、いかにも閑静な夜であつた。併し私はただ閑静だと思つ

たばかりで、別に寂しいとも怖いとも思わず、斯ういう夜の景色は確に一つの画題になる
 と、只管にわが職業にのみ心を傾けて、余念もなく庭を眺めていたが、やがて気が注いで窓を鎖じ、再び寢台の上に横になると、柱時計が恰も二時を告げた。室外の空気に頭を晒していた所為か、重かつた頭も大分に軽く清しくなつて、胸も余ほど寛いで来たから、そのまま枕に就いて一霎時うとうとと眠つたかと思う間もなく、座敷の中が俄にぱつと明るくなつたので、私も驚いて飛び起きる、その途端に何処から来たか知らぬが一個の人がげが、この広い座敷の隅の方からふらふらと現われ出た。

これには私で無くとも驚くだろう、不思議の光、怪しの人影、これは抑も何事であろうと、私は再び床の上に俯伏して、窃かに其の怪しの者の挙動を窺つてしていると、光はますます明るくなつて、人は次第に窓の方へ歩み寄る、其の人は女、正しく三十前後の女、加之も眼眩きばかりに美しく着飾つた貴婦人で、すると窓の側へ立寄つて、何か物を投出すような手真似をしたが、窓は先刻私が確に鎖じたのだから、逆も自然に開く筈はないで、其婦人は如何にも忌々しそうな、悶つたような、癪に障ると云うような風情で、身を斜めにして私の方をジロリと睨んだ顔、取立てて美人と賞讃すほどではないが、確に十人並以上の容貌で、誠に品の好い高尚い顔。けれども、その眼と眉の間に一種形容の

出来ぬ凄味を帯おびていて、所謂いわゆる殺気を含んでいると云うのであろう、その凄こい怖おそい眼でジロリと睨にらまれた一瞬間の怖おそさ恐おそしさ、私は思わず氣が遠くなつて、寢台の上に顔を押おし付けた。と思う中うちに、光は忽たちまち消えて座敷は再び旧もとの闇、彼の恐おそい婦人の姿も共に消えて了しまつた、私は転ころげるように寢台から飛降とびおりて、盲めくらさぐ探りに燵マツチ木を探り把とつて、慌あわてて座敷の瓦斯ガスに火を点とほし、室内昼の如ごとくに照てらさせて四辺限なく穿索あたつくましたが固もとより何物を見出みさう筈はずもなく、動悸どうきの波うつ胸を抱かかえて、私は霎しばらく時夢のように佇たたず立んでいたが、この夜中やちゆうに未だ馴染なじみも薄うすい番人ばんにんを呼よび起おこすのも如何いかと、その夜は其そのままにして再び寢台へ登あがつたが、彼の怖おそい顔がまだ眼の前に彷彿ささいて、迎むかへ寝られる筈はずがない、ただ怖おそい怖おそいと思おもいながら一刻千秋おといそのよの思おもひで其夜あかを明あした。と、斯こういうと、諸君は定めて臆病おそ病な奴だ、弱虫おわちだと御嘲笑おわらなさるだろうが、私も職業であるから此これまでに種々いろいろの恐おそしい図かづを見た、悪魔あくまの図ずも見た、鬼の図ずも見た、併しかし今夜のような凄こい恐おそしい女の顔には曾かつて出逢であつた例ためしがない、唯ただ見れば尋常じんじょう一いち様の貴婦人きふじんで、別に何の不思議もないが、扨さてその顔に一種の凄味おそみを帯おびびていて、迎むかへ正面から仰あおぎ視みるべからざる恐おそしい顔で、大抵の婦人小児おんなこどもは正氣を失うこと保証うけあ証だ。

扨さてその翌朝になると、番人夫婦が甲斐かい甲斐がいしく立たち働はたらいて、朝飯の卓子テーブルにも種々いろいろ

の御馳走が出る、その際、昨夜の一件を嘸し出そうかと、幾たびか口の端まで出かかったが、フト私の胸に泛んだのは、若や夢ではなかったかと云う一種の疑惑で、迂濶に詰らぬ事を云い出して、飛だお笑い種になるのも残念だと、其の日は何事も云わずに了つたが、何う考えても夢ではない、確に實際に見届けたに違いない、併し實際にそんな事のある筈がない、恐らくは夢であらう、イヤ事實に相違ないと、半信半疑に長い日を暮して、今日もまた闇き夜となつた、夢か、事実か、その真偽を決するのは今夜にあると、私は宵から寢台に登つたが、眼は冴えて神経は鋭く、そよとの風にも胸が跳つて迎も寝入られる筈がない、その中に段々、夜も更けて恰も午前二時、即ち昨夜とおなじ刻限になつたから、汝れ妖怪変化御ざんなれ、今夜こそは其の正体を見とどけて、あわ好くば引捉えて化の皮を剥いで呉れようと、手ぐすね引いて待構えていると、神経の所為か知らぬが今夜も何だか頭の重いような、胸の切ないような、云うに云われぬ嫌な氣持になつて、思わず半身を起そうとする折こそあれ、闇い、闇い、真闇な斯の一室が俄にぱつと薄明るくなつて恰も朧月夜のように、扱はいよいよ来たりと身構えして眼を瞠る間もなく、室の隅から忽ち彼の貴婦人の姿が迷うが如くに現われた。ハツと思う中に、貴婦人は昨夜の如く、長い裾を曳いてするすると窓の口へ立寄つて、両肱を張つて少し屈むかと思えたが、

何でも全身の力を両腕に籠めて、或物あるものを窓の外へ推出おしだし突出つきだすような身のこなし、それが済むと忽ち身たちまを捻向ねじむけて私の顔をジロリ、睨にらまれたが最期、私はおぼえず悚然ぞつとして最初の勇氣はじめも何処どこへやら、ただ俯向うつむいて呼吸いきを呑んでいると、貴婦人は冷ひやかに笑わらつて又彼方あなたへ向直むきなおるかと思う間もなく、室内は再び闇くらくなつて其の姿も消え失せた、夢でない、幻ま影ぼろしでない、今夜という今夜は確たしかに其の實地を見届けたのだ、あれが俗よにいう魔とか幽霊とか云うものであらう。

もうこの上は我慢も遠慮もない、その翌朝例の如く食事を初めた時に、私は番人夫婦に向むかつて、「お前さん達は長年この別荘に雇われていなさるのかね」と、何気なく尋ねると、夫の方は白髪頭しらがあたまを撫なでて、「はい、私はわたくしは当年五十七になりますが、丁度ちやうど四十一の年からここに雇われて居ります」と云う。私も怪談を探り出す端緒いちぐちに困つたが、更に左あさらぬ体ていで、「併ししかお前さん達は夫婦差向さしむかいで、こんな広い別荘に十年年も住んでいて、寂しいとか怖いとか思うような事はありませんかね」と、それとは無しに探りを入れたが、相手は更に張合はりあいのない調子で、「別に何とも思いません、斯こうして数年住馴すねれて居りますと、別に寂しい事も怖い事ありません」と、笑っている。けれども、怖い事や怪しい事が無い筈はない、現に私が二晩もつづけて彼の妖怪を見届けたのだ。で、更に問とを替かえて、

「私の拝借しているアノお座敷は中々立派ですね、お庭もお広いですね、実は昨夜、夜半に眼が醒めたのでアノ窓をあけて庭を眺めて居ましたが、夜の景色は又格別ですね」と、そろそろ本題に入りかかると、番人の女房が首肯うなずいて、「お庭は随分お広うござんすから、夜の景色は中々宜よろしゅうございましょう、併しかし貴方、アノ窓は普通なみの窓より余ほど低く出来ていますから、馴れない方がウツカリ凭より懸かると、前の方に滑のめる事がありますよ。これまでも随分ウツカリして転げ墜おちた方が幾人もあります」と聞きもあえず、私は慌てて、「そ、それは不意に墜おちるのですね、シテそれは夜ですか、昼ですか」と尋ねると、女房は打案うちあんじて、「サア何時いつと限った事ありませんが、マア闇くらい時の方が多くいようですね、ツマリ闇くらいから其様そのんな疎勿そそをするのでしようよ」と澄すましている。けれども、それは闇くらい為ばかりでない、確たしかに他に一種の魔力が手伝うに相違ない。で、私は重ねて、「で、其の墜おちた人は何どうしました、死んだ人もありましたか」相手は頭かしらを振って、「イエ死しんだ方はありません、ただ怪我けがをする位の事です、併しかし今から百年ほど以前にこのお邸やしきの若様が、アノ窓から真逆まつさかさま様に転げ墜おちて、頸くびの骨を挫くじいて死んだ事があるさうです」と、聞く事々に私はおのずから胸の跳おとるを覺えたが、猶なほも透すかさず、「それで何日頃いつから其様そのんな事が始はじまったのですね」と問えば、番人は小首をかたげて、「サア何日頃いつからか知りませんが、何で

も其の若様が窓から墜ちて死だ後、その阿母様もブラブラ病で、間もなく御死亡になつたのです。で、その後も兎かくに其の窓から墜ちる人があるので、当時の殿様も酷くそれを氣にかけて、近々の中にアノ窓を取毀して建直すとか云つてお在なさるそうですよ」と、何か仔細のありさうな噺。そう聞いては猶々聞逃す訳には往かぬ、私は猶も畳かけて、「それじゃア其の窓が祟るのだね」相手は笑つて、「真逆そういう訳でもありませんまいよ、併し其の若様が変死した事については、いろいろの評判があるのです」

噺はいよいよ本題に入つて来たから、私もいよいよ熱心に、「え、それは何ういう理屈だね、何んな評判があるのだね」と、思わず身を乗出して相手の顔を覗き込むと、番人は顔を皺めて少しく低声になり、「これは内證のお噺ですがね、勿論百年も以前の事ですから、誰も実地を見たという者もなく、ほんの当推量に過ぎないのですが、昔からの伝説に依ると、当時の殿様の曾祖父様の時代の噺で、その奥様が二歳になる若様を残して御死亡になりました、ソコで間もなく他から後妻をお貰いになつて、その二度目の奥様のお腹にも男のお兄様が出来たのです。けれども、其の奥様は大層優しい方で、わが産の児よりも継子の御総領の方を大層可愛がつて、俗にいう継母根性などと言ふ事は少しもない、誠に氣質の美しい方でした。ところが、其の御総領の若様が五歳に

なった時、ある日アノ窓の側で遊んでいる中、どうした機会か其の窓の口から真逆さまに
 転げ墜ちて、敷石で頸の骨を強く撲ったから堪りません、其のまま二言といわず即死して
 了ったのです。サアそこですね、それに就いて種々の風説がある。と云うのは、彼の継
 母の奥様が背後から不意に其の若様を突落したに相違ないと云う評判で、一時は随分面
 倒でしたが、何をいうにも証拠のない事、とうとうそれなりに済んで了ったのです」と息
 も吐かずに饒舌るのを、私も固唾を呑んで聞澄していたが、其の漸の了るを待兼ねて、
 「併しそれが可怪いじやアないか、其の奥様は大層継子を可愛がったと云うのに、どうし
 て其んな怖しい事を巧んだのだろう」相手は私の無経験を嘲けるように冷笑って「サア
 そこが女の浅猿さで、表面は優しく見せかけても内心は如夜叉、総領の継子を殺して
 我が実子を相続人に据えようという怖しい巧みがあつたに相違ないのです。それが一般の
 評判になつたので、表向の罪人にこそならないけれども、御親類御一門も皆その奥様
 を忌嫌って、誰も快く交際する者もなく、果は本夫の殿様さえも碌々に詞を交さぬ位
 で、奥様も人に顔を見られるのを厭って、年中アノ座敷に閉籠ったままで滅多に外へ出
 た事も無かつたでしたが、ツマリ自分の良心に責められたのでしよう、気病のようにブラ
 ブラと寝つきつ、凡そ一年ばかりも経つ中に、ある日アノ窓の側まで行くと、急に顔色

が變つてパツタリ倒れたまま死んで了つたそうです。心柄とは云いながら誠にお氣の毒な事で、それから後は愈よ其の奥様が若様を殺したに相違ないと決定して、今まで優しい方だ、美しい奥様だと誉めた者までが、継子殺しの鬼よ、悪魔よと皆口々に罵つたという事です」と、苦々しげに物語る。以上の嘯で彼の怪しい貴婦人の正体も大抵推察された。で、そう事が解つて見ると、私は猶々怖く恐しく感じて、逆もここに長居する氣がないから、其日の中に早々ここを引払つて、再び倫敦へ逃帰る。その仔細を知らぬ番人夫婦は、余りお早いではありませんか、せめてモウ五六日、せめて殿様がお出になるまで、と詞を尽して抑留めたが、私はモウ氣が氣でない、無理に振切つて逃げて歸つた。で、私の臆病には自分ながら愛想の竭きる位で、倫敦へ歸つた後も、例の貴婦人の怖い顔が明けても暮れても我眼に彷彿いて、滅多に忘れる暇がない。そこで私も考えた、自分の職業は画工である、斯る怪異を見て唯怖い怖いと顫えているばかりが能でもあるまい、其の怪しい形の有のままを筆に上せて、いかに其れが恐しくあつたかと云う事を他人にも示し、また自分の紀念にも存して置こうと、いしくも思い立つたので、其日から直ちに画筆を把つて下図に取かつた。で、わが眼の前に絶えず彷彿く怪しの影を捉えて、一心不乱に筆を染めた結果、何うやら斯うやら其の真を写し得て、先ず大略は出来た頃、

丁度私と引違えて彼の別荘へ避暑に出かけた貴族エル何某が、其の本邸に帰ったと
 いう噂を聞いたので、先日のお礼がたがた其の邸を初めて訪問した。主人のエルは喜んで私
 を応接間へ延いて、「過日は別荘の方へ御立寄り下すつたそうでしたが、アノ通りの田舎
 家で碌々お構い申しも致さんで、豪い失礼しました」と鄭寧な挨拶、私は酷く痛み入
 った、「イヤどうも飛んだ御厄介になりました、実はもう四五日もお邪魔をいたす筈でし
 たが、宅の方に急用が出来ましたので、早々にお暇いたしました」と、口から出任せの口
 上、何にも知らぬ主人は首肯いて、「ハアそうでしたか、私もお跡から直に別荘へ出かけ
 ましたが、貴方はもうお帰りになったと聞いて、甚だ失望しました、併し幸い今日は何に
 も用事ありませんから、ゆるゆるお嘸でも伺いたいです」と、誠に如才ない接
 待振で、私も思わずここに尻を据えて、殆ど三時間ほど世間嘸に時を移した。それか
 ら、先祖代々の肖像画をお目につけてかけようと云うので、主人が先に立つて奥の一室へ案内す
 る、私も何心なく其の跡について行くと、貴族の家の習慣として、広い一室の壁に先
 祖代々の人々の肖像画が順序正しく懸け列ねてある。で、一々これを仰ぎ視ている中に、
 私は思わずアツと叫んだ。と云うのは他でもない、彼の恐い貴婦人の顔が活けるが如く
 に睨んでいるのだ。其の恐い顔、実に先夜の顔と寸分違わず、彼の幽霊が再びここへ迷

い出たかと思われる位、私は我にもあらで身を顫わせた。その挙動が余ほど不思議に見えるたのであろう、主人は私の顔をジロジロ視て、「あなた、どうか為しましたか」私は半は夢中で、「ハイあれです、確にあれです、私は確に見ました」と辻褄のあわぬ返事、主人は愈よ不思議そうに眉を顰めたが、やがて俄に笑い出して、「あなた、其の人に逢った事がありますか。それは百年も以前の人です、アハハハ」と、斯う云われて私も気が付いた、成ほど其の仔細を知らぬ主人が不思議に思うも道理と、ここで彼の別荘の怪談を残らず打明けると、主人もおどろいて面色を変えて、霎時は詞もなかったが、やがて大息ついて、「世には不思議な事もあるものですな、実はこの婦人に就ては一条の噺があるので」と、曩に彼の別荘の番人が語った通りの昔語、それを聞けば最早疑うべくもないが、いまは百年も昔の事、其の以来曾て斯る怪異を見た者もなく、現に十五年来も其の別荘に住む番人夫婦すらも、曾て見もせず聞きもせぬ幽霊の姿を、無関係の私が何して偶然に見たのであろう、加之も二晩もつづけて見るというのは実に解し兼ねる次第で、思えば思うほど実に不思議な薄気味の悪い噺だ。で、主人の驚愕は私よりも又一倍で、そう聞く上は最早一刻も猶予は出来ぬ、早速その窓を取毀し、時宜に依れば其の室全体を取壊して了わねばならぬと、直に家令を呼んで其の趣を命令した。で、今頃は其の窓も容

赦なく取毀とりこわされて、繼母まははの執念も其その憑よる所を失つたであらうか。

以上が画工エリックの物語で、同雜誌記者の附記する所によれば、彼の画工の筆に成つた恐しき婦人の絵姿は此このほど全く出しゅったい来たいしたが、何さま一種云われぬ物凄おびい恐ふるしい顔である、婦人の如き、其その図を一目見るや忽たちまちに魘おびえて顫ふるえて、其後そのご一週間ほどは病床に倒れたという。で、普通の日本人の考かんがえ慮えから云うと、殺した方が人が化けて出るといふのは、些ちと理屈に合あわぬように聞きこえるが、何分にも其処そこが怪談、万事不可思議の所が事じじつ實譚だんの価値ねうちであらう。

(狂生)

青空文庫情報

底本：「飛騨の怪談 新編 綺堂怪奇名作選」メディアファクトリー

2008（平成20）年3月5日初版第1刷発行

初出：「文藝倶楽部」

1902（明治35）年8月号

※初出時の署名は「狂生」です。

入力：川山隆

校正：山本弘子

2010年4月19日作成

2013年8月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

画工と幽霊

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>